



大正10年頃の白石停車場

白石駅は、幌内鉄道駅、定山溪 鉄道の始発駅として活躍

黒船渡来が炭鉱開発のきっかけ

徳川幕府は安政元年(1854)に日米和親条約を締結し、下田港と函館港を開港した。条約締結から1カ月後、5隻の黒船が函館に入港し、住民を驚かせた。これを機に外国船の入港が多くなったが、一様に船の燃料である石炭の補給を求めた。

当時北海道では石炭は採掘しておらず、幕府は元治元年(1864)岩内場所・茅沼炭鉱で採炭に着手した。しかし搬出と海上輸送で経費がかさみ、1年で廃止した。

函館奉行はイギリス人の鉱山技師E・H・Mガワーと機械技師G・スコットの二人を雇い、再び茅沼炭鉱の採掘を始めた。鉄道輸送によって搬出の効率化を図り、茅沼炭鉱がこの後百年続いた基礎を築いた。船舶の燃料などで石炭の需要は急速に伸び、開拓使にとって炭鉱経営は魅力的な仕事となっていた。そこで開拓使は新たに幌内炭鉱の開発を考えた。

明治5年に招いた地質学者B・S・ライマンが調査の結果、幌内には1億トンの埋蔵量があると推定した。

幌内鉄道の敷設で白石にも鉄道が幌内炭鉱が操業を始めた明治11年

に、鉄道・道路・土木技術建設の指導者として、当時36歳の土木技術者J・U・クロフォードが着任した。

翌年2月、黒田長官はクロフォードに「幌内鉄道は石炭輸送が目的だから、構造は堅牢なものにし、将来全道に敷設される鉄道と連絡すべきものなので、その路線を決めるにあたっては十分に注意してほしい」と訓令したという。

石炭は船舶や製鉄所の燃料として安定供給が急務だった。鉄道敷設には室蘭ルートと小樽ルートを検討したが、小樽側から鉄道工事を始めれば資材輸送で有利なため、開拓使は鉄路を手宮～札幌～幌内と決定し、明治13年7月に工事を始めた。鉄道は同年11月に仮停車場に達した。わが国では3番目に敷設された鉄道である。工事費は約45万円だった。

幌内鉄道の車両はアメリカ製で、機関車2台、客車8両、台車17両、函車9両は帆船ジェラルド・C・ドベイ号で運ばれた。2台の機関車は当時のニューヨーク日本領事によって『弁慶』『義経』と命名された。

明治15年11月13日に運転を開始した鉄道に積み込んだ石炭が、翌日には手宮港に到着して関係者を感動させた。



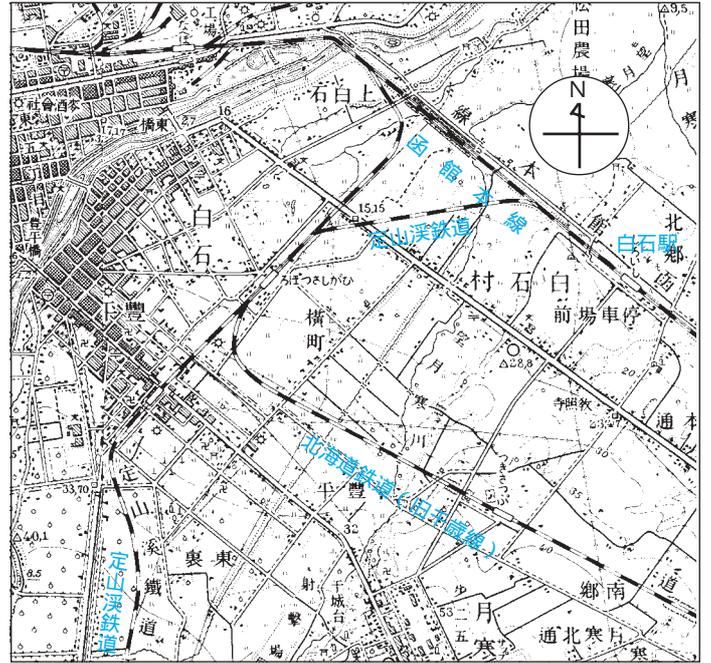
幌内鉄道は明治22年12月に北海道炭
鉱鉄道が開拓使から払い下げを受けた。
それまで冬期間運休していた札幌以東
は通年運行を実施し、札幌・幌内間を
2時間5分で結び、大幅なスピードア
ップが実現した。

白石フラグ・ステーション

札幌・幌内間の鉄道の間には江別、幌
内太(今の三笠)に駅が設けられた。白
石村には現在の駅の100^mほど厚別寄
りに白石仮乗降場が設けられた。必要
なときにフラグ(旗)を掲げて汽車を
止め、客の乗降や貨物の荷下ろしをす
るのでフラグ・ステーションとも呼ば

幌内の輸送は、温
泉客だけでなく、
木材や鉱石の運
搬にも必要なも
のだった。

財界人は定山
溪鉄道を計画し、
はじめは国鉄苗
穂駅・定山溪間を
考えたが、大正2
年8月に豊平川左
岸堤防が洪水で
大決壊し、鉄道予
定地が護岸工事



昭和10年発行5万分の1地形図。定山溪鉄道、北海道鉄道、函館本線が描かれている



札幌・幌内間を走った義経号

れた。

北郷最初の入植者である稲垣岩松が
明治15年11月に乗車券の取り扱いを代
行していたといわれる。白石からは特
産のレンガと木炭が積み出されたが、
明治16年に駅は廃止された。

明治36年4月1日に本格的な駅舎が
建築され、白石駅が誕生した。この停
車場の敷地は鈴木煉瓦製造場社長の鈴
木豊三郎が提供し、人夫や資金面でも
援助したという。

時が過ぎ、駅周辺には農協、小前コー
クス工場、朝日スレート工場、農産化
学工場、製材場、煉瓦場などが操業し
ていた。また、水田や畑が見渡す限り
広がっていた。駅は物流基地として人
や荷馬車の往来でにぎわった。

白石駅始発の定山溪鉄道を敷設

札幌の奥座敷と呼ばれる定山溪・札

のために使えなくなり、国
鉄との接点を白石駅に変更
して敷設した。軌道と車両
は国鉄払い下げの中古品を
使い、大正7年10月17日
から白石・定山溪間(29.9
^{km})の鉄道営業を開始した。

昭和4年に札幌市電が豊
平駅に乗り入れたために札
幌市内の乗客はほとんど豊
平駅から乗るようになっ

た。また、昭和6年に北海道鉄道(後の
千歳線)の東札幌から苗穂までの区間
を使って、苗穂駅始発、東札幌経由で

定山溪へ行けるようになったため、昭
和16年2月に白石・東札幌間の旅客営
業を廃止し、昭和20年3月に貨物営業
も廃止した。

“春若葉、夏はせせらぎ、秋紅葉、冬
は雪見に、いで湯の香り”(露香)など
といわれ、農閑期には白石駅からの湯
治客でにぎわったが、いつしか人々か
ら忘れられた。

定山溪鉄道はその後20年以上にわた
って定山溪に人を運び続けたが、自
動車の普及で乗客が減り、昭和44年に
廃止した。

(南部 享)



明治15年から16年まであった白石仮乗降場